

# ギャロンにおけるカル(mkhar)の機能について

——四川省丹巴県中路郷を中心に

セルボンジャ (賽本加)

滋賀県立大学大学院 人間文化学研究所 地域文化学専攻

## はじめに

ヒマラヤ山脈地域と横断山脈地域に、石を積み重ねて築かれた建築物が数多く分布している。その中でも、横断山脈地域のチベット民族とチャン族の二つの民族が居住する地域、現在の中国四川省は現存数が多く、外形の種類が多いところである。筆者が調査した四川省丹巴県ではその建築物を「カル」と呼び、県文物管理所の調査によれば、県内にはカル562基が現存していると報告されている。

## 一、先行研究と問題の所在

### 1、研究略史

19世紀から、外国人の探検者が四川省において、カルの写真と記述を残した。古写真が100年以内の保存と修復状況を確認するには重要な資料となっている。

20世紀20年代、カルに関する研究が始まったが、初期の研究ではほぼ紹介に止まり、のちに『後漢書』、『唐書』などの文献資料に基づき、カルの起源と所有する古代氏族、各地域への伝播などに関する研究が行なわれた。また、文化人類学の研究方法で、各地の伝説に基づき、カルが当地において、どのような存在であるかについて研究されてきた。

2002年、夏格旺堆氏がチベット自治区におけるカルを調査し、従来四川省だけをめぐる議論から、チベット自治区、四川省、雲南省、青海省を含むヒマラヤ山脈地域と横断山脈地域の広い範囲の議論を展開した。

特にフランス人の Frederique Darragon 氏が四川省、チベット自治区において、外形の特徴から四つの地域に分け、それぞれの代表的カルに炭素14年代測定を行い、カルの築造した実年代が確定でき、研究が新たな段階に入った。

のちに、北京大学の考古文博学院と成都市博物院が四川の西部において、60基のカルを詳しく調査した。また、その一員であった黄曉帆氏が30基を調査し、清の時期の文献と Frederique Darragon 氏の年代測定結果に基づき、四川西部におけるカルの変遷について論じた。以下先行研究の内容を詳しく

述べる。

## 2、カルに関する主な論点と先行研究

### I 最初の築造年代、場所

カルの最初の築造年代、場所についての研究が従来の重要な論点の一つである。7世紀に造られたチベット語では当然ながらそれ以前の記述がなく、それ以前は漢文史料の記述からカルの最初の築造年代、場所について研究された。

R.A.スタン氏が『隋書・西域』「附国」の條に「附國者，蜀郡西北二千餘里，即漢之西南夷也。有嘉良夷，即其東部，所居種姓自相率領，土俗與附國同，言語少殊，不相統一」また、「俗好復讎，故壘石為礮而居，以避其患。其礮高至十餘丈，下至五六丈，每級丈餘，以木隔之。基方三四步，礮上方而三步，狀似浮圖。於下級開小門，從內上通，夜必關閉，以防賊盜」と記述し<sup>1</sup>、『旧唐書・南蛮 西南蛮』「東女国」の條に「東女國，西羌之別種，以西海中復有女國，故稱東女焉。俗以女為王。東與茂州，党項接，東南與雅州接，界隔羅女蠻及白狼夷。……其所居，皆起重屋，王至九層」との記述から<sup>2</sup>、塔(カル)の祖型は6世紀の東チベットの附国と女国において見いだされ、チベット自治区のコンポでは12世紀初頭からその存在が知られているとする(R.A.スタン：1962)。

石碩氏は『後漢書・南蛮西南夷列伝』に「冉駹夷者、武帝所開、元鼎六年、以為汶山郡……衆皆依山居止、累石為室、高者至十餘丈、為邛籠」<sup>3</sup>との記述から現在四川省の岷江上流が礮楼(カル)の起源とする(石碩：2008)。徐学書氏も『蜀王本紀』に「蠻叢始居岷山石室中」<sup>4</sup>との記述から同じく岷江上流であると主張する(徐学書：2004)。

しかし、楊嘉銘氏は現在各地で見られる礮楼(カル)の種類(外形)がほとんど大小金川流域に揃い、丹巴県中路郷で新石器時代の「石室」<sup>5</sup>を発見したことから、大小金川流域がその起源とした(楊嘉銘：1988、2004)。

また、最初の築造場所が古代氏族と一緒に語る場合が多く、R.A.スタン氏が現在四川西部の各民族

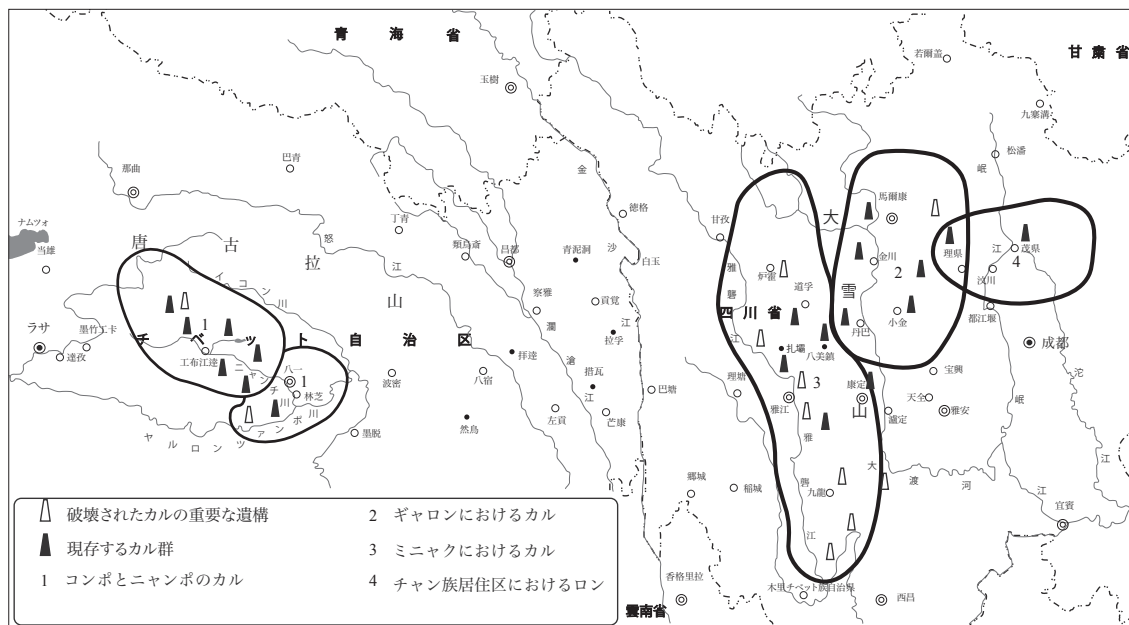


図1 チベット自治区と四川省におけるカルの分布状況 Frederique Darragon (2005, 2015) より 筆者加筆

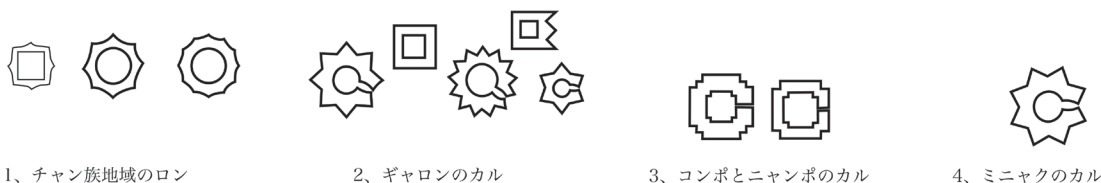


図2 各地域におけるカルの外形 Frederique Darragon (2005)

が羌人の後裔で、羌人によって造られたとする (R. A スタン:1962)。孫宏開氏は言語学の視点から『後漢書』に記述された「邛籠」はチャン語支を固有の言語とする諸集団と密接に関係すると推測した (孫宏開:1981, 1986)。石碩氏は前述した『後漢書・南蛮西南夷』の記述から夷人によって造られたと述べる (石碩:2001)。また、馬長寿氏はギャロンチベット人の分布と礪楼 (カル) の分布が一致すると主張し、ギャロンをその起源にされた (馬長寿:1984)。

築造年代に関して、『後漢書』の記述から、後漢以前にカルが存在したと述べている (石碩・楊嘉銘・郷立波:2012)。しかし、これらの文献研究では現存するカルがいつ造られたについて論述されていない。

## II カルの分布状況について

文献史料での研究は四川省を巡って論述してきた。2002年、夏格旺堆氏はチベット自治区内のカルを調査することによって、カルが四川省だけではなく、チベット自治区にも現存することから、チベッ

ト高原全体の論述が始まった (夏格旺堆:2002)。

2005年、Frederique Darragon氏がカルの外形の特徴から、チベット自治区のコンボ (kong pu) とニャンボ (nyang po)、四川省のチャン族地域、ギャロンチベット地域、ミニャク地域の四つの地域に分けた (Frederique Darragon:2005, 2015) (図1, 2)。

黄曉帆氏の研究で、四川西部において、1. 岷江とその支流の黒水河、雑谷脳河流域、2. 大渡河とその支流の大金川 (その支流の緯斯甲河と梭磨河流域)、小金川流域、3. 雅礮江とその支流の鮮水河、力丘河流域などカルが川沿いに築造する傾向が見られると述べる (黄曉帆:2008)。

## III カルの築造技法について

カルを基盤、壁体、最上部三つの部分に分けて、築造技法を述べる。本論で使うカルの各部分の名称を図3に基づき、論述を展開したい。

### i 基盤

楊嘉銘氏はカルを造る時、地面を掘り下げて平らにした後、石を積み重ねて基盤を造り、基盤の広さ

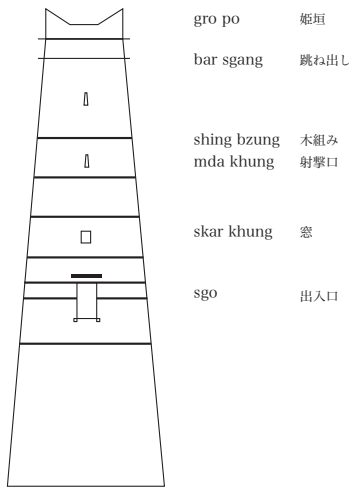


図3 カルの各部分の名称 筆者作成

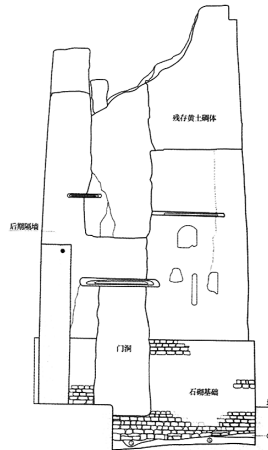


図4

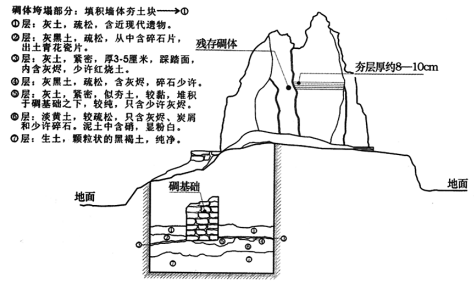


図5

図4、5 汶川县威州鎮克枯郷布瓦村における土造りのロンの基盤 石碩・楊嘉銘・鄒立波(2012)より

と厚さでカルの大きさと高さを決めると述べる(石碩・楊嘉銘・鄒立波：2012楊嘉銘執筆)。現在カルを新築することはなく、発掘調査の事例も少ないが、2009年、四川省汶川県威州鎮克枯郷布瓦村におけるチャン族の土造りのロン<sup>vi</sup>を発掘調査した。版築で造られたロンは地面以下に石積みの基盤を造っていたことが分かった(図4、5)。

## ii 壁体

### ①外側の角

現存するカルを外形から四角形、五角形、六角形、八角形、十二角形、十三角形に分けている。中華民国時代の任乃強氏はカルの外側の角が多ければ多いほど倒れにくいと述べる。楊嘉銘氏も同じ意見を持っている(石碩・楊嘉銘・鄒立波：楊嘉銘分担2012)。

### ②内側の作り方

カルの内側が方形、円形の二つに分けられる。外形四角形のカルは内側も四角形で、外形五角形も内側が方形を呈し、外形四角形に三角の角を追加することで、五角形になっている。外形六角形、八角形、十二角形、十三角形の内側は円形を呈している。

楊嘉銘氏は外形六角形以上のカルは、外側に角を追加することによって、内側に傾斜力が大きくなり、内側の方形の作り方がこのような傾斜力に耐用できなく、円形を作ることによって内外の平衡状態を保っていると述べる(石碩・楊嘉銘・鄒立波：楊嘉銘分担2012)。

黄曉帆氏はカルの内側に控壁、隔壁を造られているのに注目し、その作り方でカルの築造技法の変遷



写真1 控壁



写真2 隔壁

が見られると論述している(黄曉帆：2008)。この点については詳しく第4節で述べる(写真1、2)。

### ③反り

カルは底部が大きく、上部が細くなり、梯形を呈している。この状況は前述した『隋書・西域傳』の「附国」の條の「基礎の部分は方三四歩、上は方





写真3 木組み Frederique より



写真4 木組み

二三歩、そのかたちは仏塔に似る」と記述されているのと同じく、隋朝 (581～619年) の時はすでにこの作り方をういたと考えられる。楊嘉銘氏はこのような反りを造ることによって、建造物の自重、重心を低くすることができる」と述べる (石碩・楊嘉銘・鄒立波：楊嘉銘分担2012)。

#### ④横目地を通して壁体に木材を使用

カルの築造に使用する石材は当地で産出する石で、加工しないもしくは粗割したさまざまな石材を混ぜて積み上げている。一定の高さを積み上げてから、横目地を通るように平らにする。楊嘉銘氏はこれに二つの役割があり、一つは横目地を通るように平らにし、壁体に木材を差しこみ、カルの内部各層の梁となると述べる (石碩・楊嘉銘・鄒立波：楊嘉銘分担2012) (写真3、4)。この状況はまさに前述した『隋書・西域傳』の「附国」の條に「各層は一丈あまり、それを木で区切ってある」と記述された通りである (図6)。もう一つはカルの壁体と並行で木組みを置く。カルは自然石と粗割した石で積み上げたので、地盤が弱いところで、一部沈下することによって、カル全体が崩れる恐れがある。黄曉帆、楊嘉銘両氏は木組みを置くことによってカルの



図6 カルの断面模式図 筆者作成

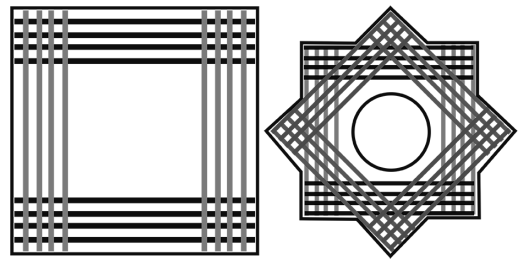


図7 木組みの並べ方(黄曉帆2008)より

整体性を保っていると述べる。

木組みの置き方に関して、黄曉帆氏は外形四角形のカルを例にあげ、相対する両面に木組みを置き、その上に逆方向の相対する面に木組みを置くと述べる (図7)。

#### ⑤分段して増築

季富政氏の『中国羌族建築』に一層を積み上げたから一定の時間を経て乾かしてから増築するので、カルあるいは住宅を建てるには数年が必要であると述べ (季富政2000)、さらに、楊嘉銘氏は季富政氏の説に加えて、カルは高層建築なので、重力が大きい。かつ築造場所が溪谷地帯だから、地質が複雑で、基盤、築造技術などに問題が発生した場合、直ちに直すことを考えると、一定の高さまで積み上げて、異常な状況が発生するかを確認してから増築すると述べ、季富政氏と同じく一つのカルを造るには数年必要で、10年余り<sup>iv)</sup>で一つのカルを造るのもあると述べる。

#### iii 最上部

カルの最上部の作り方が、ギャロンチベット地域とチャン族地域で異なるが、ギャロンでは最上部に



写真5

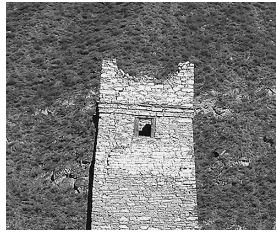


写真6



写真7



写真8



写真9 石碩・楊嘉銘・鄒立波(2012)より



写真10 黄晓帆(2008)より

持ち送りや跳ね出しを造り、その上に姫垣を造る(写真5～8)。チャン族地域では「照楼」と言われ、最上部の後部に壁を造る(写真9、10)。

#### IV 現存するカルの築造年代及び変遷について

第1節の文献史料の研究で、カルの起源に関して論述してきたが、現存するカルの築造年代に言及していない。フランス人の Frederique Darragon 氏が四川省、チベット自治区においてカル82基に放射性炭素14年代測定を行い、始めて現存するカルの実年代が分かり、研究が新たな段階に入った。

のちに、北京大学の考古文博学院と成都市博物院が四川の西部において、60基のカルを詳しく調査した。また、その一員であった黄晓帆氏が30基を調査し、文献記述と Frederique Darragon 氏の年

代測定結果に基づき、四川西部におけるカルの変遷について論じた。

氏によると、南宋以前の文献記述では築造年代が明確なカルがなく、かつ現在確定できる炭素14年代測定結果も南宋に当たると述べ、また、平面構造から、1. 内側が方形、外側も方形、2. 内側が楕円形、外側が星型、3. 内側が楕円形、外側が異多辺形の3類に分け、内側の構造、最上部の作り方から変遷を論じた。

氏は丹巴県において、カルの内部の控壁と隔壁の有無と最上部の作り方の変化に注目し、カルの内部に控壁と隔壁を造り、最上部に跳ね出しがないもしくは跳ね出しの突出距離が短い作り方が第1期で、南宋晩期から明中期のカルにその作り方が見られ、カルの内部の控壁、隔壁を撤去し、最上部の跳ね出しの距離が遠くなり、かつ持ち送りの作り方を使用し、その上に姫垣を造るのは第2期で、明中期から清後期のカルにこの作り方が見られると述べた(黄晓帆2008)(図8、9)。



図8 控壁、隔壁(黄晓帆2008)より

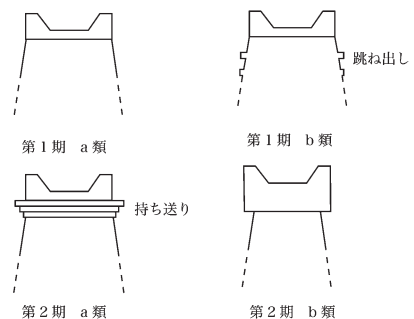


図9 最上部の変遷 筆者作成

## V 機能について

カルの機能について現在防御論、信仰論、総合論の三つの説がある。防御論に関して、イザベラ・バード氏が1896年ギャロン地域に探検し、カル(氏は塔と呼ぶ)をどのように使ったのかについて、当地の「蛮子」<sup>1)</sup>からただ一つ伝承があるのは、「昔」は、屋根の上で火をともし、家を離れている村人に、向かって来る敵から家を守るよう合図したということだけだった。中には穀物倉だったと考える者もいると述べ、氏は「石と土で造った容易に撤去できる通路を扉のついていた出入口の所まで順次設けて貯蔵物や家畜を取り込んだ後、このような一時的なスロープ[状の通路]を撤去する。そして、独木梯によって最後の入口まで行ってこの梯子を塔の中に引き上げる、と。これを引き上げるのは簡単なことである。つまり、塔は避難場だったのであり、下に家畜、上に人間が住み、食料も飼料も同じカル(塔)の中に蓄えたのである。このように考えると同じ村にしばしばたくさんの塔があることの説明がつく。村の長や、豊かな村だと村人一人がこのような避難場を持っていたということも十分にありえることである。」とする(金坂清則訳2002:143-144)。

イギリス人の W.N.Fergusson が1908年川西高原を訪れ、「このような大きい**碉楼**(カル)に二つの機能があり、一つは突然襲撃された際に、**碉楼**(カル)の上で狼煙を上げることによって、村人の助けをもらえる。二つめは財産と穀物を保つ。家畜を**碉楼**(カル)の底部に閉じ込め、分厚い門で閉める。居民は**碉楼**(カル)の周囲において猛烈な攻撃に抵抗し、攻められた時に、**碉楼**(カル)に入り、梯子で二階に登り、窓から石を投げて防御する」と述べ、また「この地域で自然環境が最大限の保障ができる。多くの村あるいは要塞と称する位置に、多くの人数が必要なくむら全体の防御ができる」と推測された(W.N.Fergusson:2003)。

馬長寿氏はカルが自衛のために造られたと述べ(馬長寿:1984)、王明珂氏は防御の機能が明確であると(王明珂:2002)。徐学書氏はカルが軍事的な施設であり、軍事的防御のためにカルを建てたと述べる(徐学書:2004)。楊嘉銘氏も動乱と戦争で身を守る必要に応じてカルが築造されたと論述した(楊嘉銘:1988)。張昌富氏が大小金川の戦役でカルの防御機能を果たしたと論述された(張昌富:1995)。高田時雄氏も清代の平定両金川戦役の際、

「進軍の前に大きく立ちはだかった**石碉**(カル)が、少なくともこの時代に広く用いられていたことが知り得る。」また、「かつては土司の官寨の周囲に**石碉**が建て巡らされているのは当然として、民居にも各戸に附属施設として**石碉**(カル)が備えられていた。普段は住居の一部として使用されるが、戦時には砦になるのである」とする(高田時雄:2012)。

信仰論に関して、石碩氏はカルの出現は人と神の関連する祭祀性建築物で、のちに争いの防御施設となったと主張している(石碩:2008)。

総合論に関して、牟子氏は丹巴県のカルが戦争と民居の総合的な施設で、のちに外敵を防御する施設になったと述べる(牟子:2002)。楊嘉銘氏は民俗学の視点から、カルが単純な建築物ではなく、成人式などさまざまなことが考えられると述べた(楊嘉銘:2004)。

紅音氏は『促浸大金川繞丹杰布源流概況』の記述から修行者によって作られ、彼らの修行の場所となり、土司が所有する**碉楼**(カル)が通常九層以上であり、居館の両側に立て、規模が大きく、六角形、八角形など築造することが難しいもので財産、権力を示しているとする。また、聞き取り調査によって、民俗的な役割も強調し、『新実録』の土司の呈文から、土司と土司の領土境界を示す機能があったとする(紅音:2014)。

Frederique Darragon 氏は塔(カル)に関する文献の欠如現状から、塔(カル)自体の特徴、すなわち、所在地と地理環境の関係、大きさや出入口の位置から考えるしかないと提示し、その用途を以下四つに分けられている。

- 1、現在羌族村において、塔(カル)が防御を目的とした建築物であるが、平和な時期往往にして身分や地位を示す重要な象徴となる。
- 2、丹巴の塔(カル)は信じがたい高さで精緻な外形を成し、山上の各住居の間に散乱している。最初は貯蔵のために作られ、最終に防御施設となった。而して多くの伝説から、主に身分と地位の象徴であることを実証されている。
- 3、豊かな山谷村落の商売ルートにおいて建てられた塔(カル)が、山谷を一見できる通常高地の南斜面に建てられる。それが防御に有利である可能性のほか、肥沃な畑に住居を建てることを避けられる。この状況は北ギャロンのほか、ミニャク地域及びチベット自治区のコンポにも見られる。多数の山谷が



「茶馬古道」に位置し、塔(カル)が地震に強く、防御に便利な点から、茶、シルク、塩など商品を貯蔵する可能性が考えられる。

4、松岡地区のように、村と遠く離れ、山頂、山谷の入り口など要塞的な塔(カル)が、狼煙を上げることによって、緊急を知らせるのだらうと推測されている(Frederique Darragon : 2005)。

### 3、問題の所在と研究方法

以上の研究から、チベット高原におけるカルの基本的な認識ができるが、地域ごとの詳細な研究が課題になっている。特に、四川省丹巴県はカルの現存数が最も多いところで、県内に現在カルは562基存在すると言われているが、詳細な調査が行われていないため、本稿では丹巴県中路郷におけるカルについて詳細な調査を実施し、その結果に基づき、この地域でのカルの機能について論じる。

カルにはギャロン各地域によって異なる名称がつけられている。民族学者の馬長寿氏は『嘉戎民族社会史』において、ギャロンではカルのことを「達寧」「達益」と言われると述べている(馬長寿 2003:129)。また、多爾吉、阿根、紅音三氏の『東方金字塔高原碉楼』において、da yung, di gi yu, da yo, choと称する地域があると記述されている(多爾吉、阿根、紅音:2011)。漢文史料では邛籠、鷄籠、碉と記述されている。各地域の名称に統一がなく、史料記述にも各時代の名称が変わっている。

史料と地域の差から、先行研究において、カルの名称に統一がなく、「高碉」、「碉楼」「塔」「塔楼」などを付けてきたが、その中にラカン(仏堂 lha khang)も含まれている。同じく石積みの建築物であるが、現地では両方を分別している。内側に壁画を描いたものをラカンと言い、ラカンには射撃口がなく、純粋な宗教的施設である。しかし、カルの内側には壁画が描かれず、四面に射撃口が設けられ、軍事的な要素が強い。そこで、本論ではラカンをひとまず割愛し、カルだけの機能を論述する。

研究方法として、丹巴県中路郷の各村に現存するカルの分布状況、平面構造(外形、内側に控壁と隔壁の有無、家屋と連結するかどうか)、立面的構造(出入口の位置、射撃口の有無、最上の作り方、白石の符号の有無)の詳細なデータを集め、黄曉帆氏の変遷案と Frederique Darragon 氏の炭素14年代

の結果に基づき、築造年代を把握する。カル自体の特徴と築造年代に適応する歴史背景から、その機能を論じたい。

## 二、丹巴県中路郷におけるカルの現状と特徴

### 1、丹巴県中路郷の概要

中路郷は四川省丹巴県の中央部東寄りに位置し、東に岳扎郷、南に梭坡郷、西に水子郷、西北は巴旺郷に接し、総面積は47.36 m<sup>2</sup>である。現在行政村が10ヶ村あり、小金川が郷内から流れる両側の山の斜面に位置している(図10)。

『丹巴県誌』によれば、罕額依遺跡の発見によって、新石器時代からこの地域に人が生活していたことがわかった。漢代には西羌に、隋代に嘉良夷、唐代に羈縻金川州に属した。吐蕃が東に領域を拡大することによって、東西嘉良夷、金川州はその支配下に置かれた。宋代に東西嘉良州が設置され、元代から土司制度が始まり、威、茂両州の千戸、万戸所及び長河西、魚通、寧遠軍民安撫司によって支配された。明代は元の制度を引き継ぎ、金川演化禪師、明正(lcags la)土司によって支配され、清朝に入る

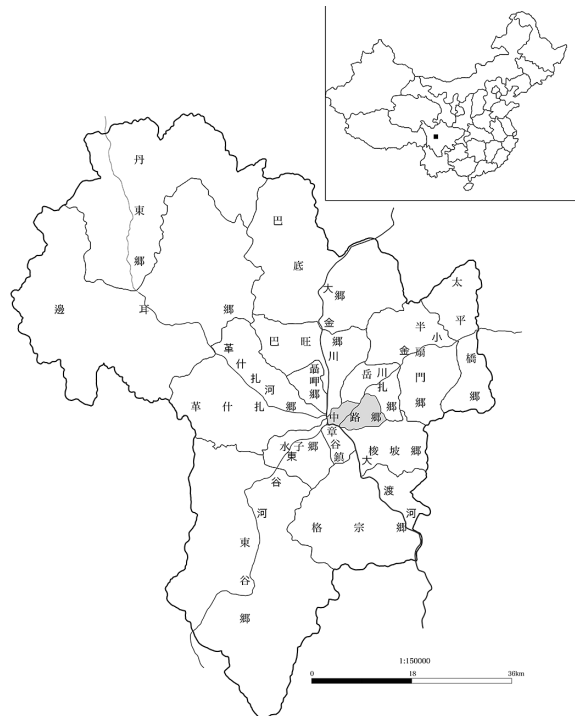


図10 中路郷の位置 筆者作成

と、巴底(pa wam)、巴旺(pa wam)、丹東革什扎(mda mdo dge bshis tsa)土司、明正(lcags la)土司、儂拉(小金 btsan lha)土司によって分割・統治された。乾隆中期に「改土設屯」の政策で、章谷屯が設置された。1873年、明正(lcags la)土司所轄の十七土百戸を章谷屯の中に編入したと述べている<sup>ix</sup>。

丹巴県の県名はこの地域の丹東(mda mdo)、巴底(brag steng)、巴旺(pa wam)三土司の名前から、初文字を取った総称である。当地では丹巴県を含むこの地域をギャロン(rGya rong)またはギェロン(rGyal rong)と呼ばれている。漢籍には「嘉戎」という固有名詞は明代以前に出現しないが、チベット語史料において吐蕃王朝成立や吐蕃の吐谷渾攻略に絡む関係者ないし地名としてrGyal mo rongの名が見える(長野泰彦2018:5)。この地名の由来として、dmu dge bsam gtan氏はギェモムルド((rGyal mo dMu rdo)と呼ばれる聖山の周辺地域のことをギェロン(rGyal rong)と言われると述べている(dmudge bsam gtan 1997:331)。別称のギャロン(rGya rong)はSamten G.Karmay氏によりshar phyogs rGyal mo rgya yi rongに由来し、現在四川省康定(dar rtse mdo)から松潘(zong chu)までの地域のことであると述べた(Samten G.Karmay 2007:102)。長野氏は大小金川を中心とする西部rGyal mo rongと、雑谷を中心とする東部tsha ba rongを併せてrGyal mo tsha ba rongと言ひ、さらに略してrGyal rongと言うと述べている(長野泰彦2018:6)。

## 2、ギャロンの略史

明清以前からギャロンは、各地方の首領に支配されていた。これらの地方首領の由来につき、馬長寿氏が調査した際、ギャロンの土司は西チベットのキュン(khyung)と言われる氏族の後裔であると自称し(馬長寿)、西チベットのシャンシュン(zhang zhung)の女王が、国が栄えるにつれ、人々の生活を支える自然環境に無理が生じ、王族たちに現在ギャロンの地に東遷させた伝説もあった(長野泰彦:2018)。

漢文史料には東西二つの女国が現れ、西の女国、つまり伝承に残るシャンシュンが3-4世紀に東遷した。東遷の理由は定かではないが、当初はKhams stodへ、そして次に金川方面(おそらく章谷近辺)に移動した(泰彦長野:2018)。

7世紀から8世紀、吐蕃が東に勢力を張り、ギャロンのリーダー達が吐蕃に対して恭順の態度を示すようになった。吐蕃の勢力が衰えてから明に至るまで、ギャロンにおいてある種の安定状況が続いた(長野泰彦:2018)。

フビライによる1253年の大理遠征時、西、中、東三路と同じくギャロンを通っている。その中、中路軍は馬爾康('bar khams)、丹巴(rong brag)を通過した(石堅軍2009、鄒立波2017)。その後、モンゴルが南宋を攻めた。当時ギャロンを含む西南の各少数民族が、モンゴルと南宋が対峙する間に挟まれ、モンゴルは「先に西南諸蕃を取るを以て天下を図る」(先取西南諸蕃、以図天下)政策で、西南諸蕃を取る計画をした。一方、南宋も各部族(諸蛮)を撫して、モンゴルを防ぐ障壁にしようとした(曾現江:2007)。

元王朝が中国を統一した後、チベットを鳥思蔵宣慰司、吐蕃等處宣慰司、吐蕃等路宣慰司に分け、元の管轄下に置いたが(鄒立波:2017)、その勢力はギャロン中心地までは及ばなかった。『Deb ther rgya mtso』<sup>x</sup>において、「Chu chen(川名、大金川)の南側にbsTan pa(地名、丹巴)、Rab brtan(土司名、大金川)、bTsan lha(土司名、小金川)などの王国があるが、最後の二つは勢力が強かったため、蒙古王の時代から、その支配下に入らずにいた」(山口瑞鳳:1971)との記述からその状況を伺える。

吐蕃の将軍の後裔であれ、ほかの有力者であれ、明清時代の前から、地方首領がいたが、明代になると、地方首領、あるいは宗教的地位が高い高僧が明に帰順し、明は彼らによる影響力で間接的に統治し、彼らも明から給された称号によって権威を高める。いわゆる「土司政策」が本格的に始まったのである。清朝になると、土司の数が増え、本来あった地方首領や高僧のほか、清朝に従い、優れた戦績があった人も土司に拜命された。

「これらの土司のあいだには、当然文化や宗教の面で共通する点も多いが、やはり箇々に異なった特性もあって、通婚などを通じて連帯する場合もあるが、互いに相争う場合もしばしばであった」(高田時雄:2012)。ギャロンは「地理的には青藏高原から四川盆地にかけて山岳地帯にあたり、おおむね標高1500~2900メートルの中間山地帯である。中規模河川が削る険しいV字谷になっている」(長野泰彦:2018)。このような環境の中で、農耕する土地が



極めて少ない。土司間の争いは常に土地の奪い合いによって展開している。各土司は他の土司の領土、百姓を奪い合い、自分の勢力を拡大しようとしている。ギャロンの土司は常備軍を持たなく、民からの徴兵となり、平和の時は農民であるが、戦時に戸によって臨時徴兵をする(鄒立波：2017)。争いは小団体の略奪式の争いで、規模が小さく、期間が短い。争いはほとんど夏に行い、冬になると双方の誓いで終わる。前述したように、力が強くなった土舎と頭人が土司によるコントロールが難しくなり、各自出世することに念を入れている。逆にこのような立場にいる土舎や頭人の領域は常に各土司の争う焦点になって、最終的に争いの犠牲者になる(鄒立波：2017)。

明代には、雑谷安撫司と董卜韓胡宣慰司がそれぞれ近隣の小土司を支配下に置き、半世紀に渡って争いが続いた。清朝になると、土司間の争いがさらに

激しくなった。明は主に帰附した僧俗首領たちに称号を与え、彼らを通して地方の政教のことを管理した。同時にチベット族の僧俗首領との朝貢関係と、藏(チベット)漢の茶馬貿易をコントロールし、政治、経済的利益で各土司の帰順を維持した(陳慶英：1999)。ギャロン土司間の争いを静観し、多くの場合仲裁者の立場であり、土司間の紛争はコントロールできなかった(鄒立波：2017)。しかし、清朝になると、ギャロン土司間の関係につき、清朝に従って戦績のあった人が土舎に拜命され、土司の権力を分割し、土司と土舎の従属関係を破壊し、土司の勢力にコントロールされた。土司間の紛争が激しくなった場合、地方官員がその調停者になるのである(鄒立波：2017)。調停するに対し、勢力を張って近隣土司を侵攻する側に、清朝の地方官員が他の土司を連結させ、それに攻撃する方法を取る。すなわち、「番を以て番を治する」(以番治番)政策である。しかし、この政策がなんども失敗したので、

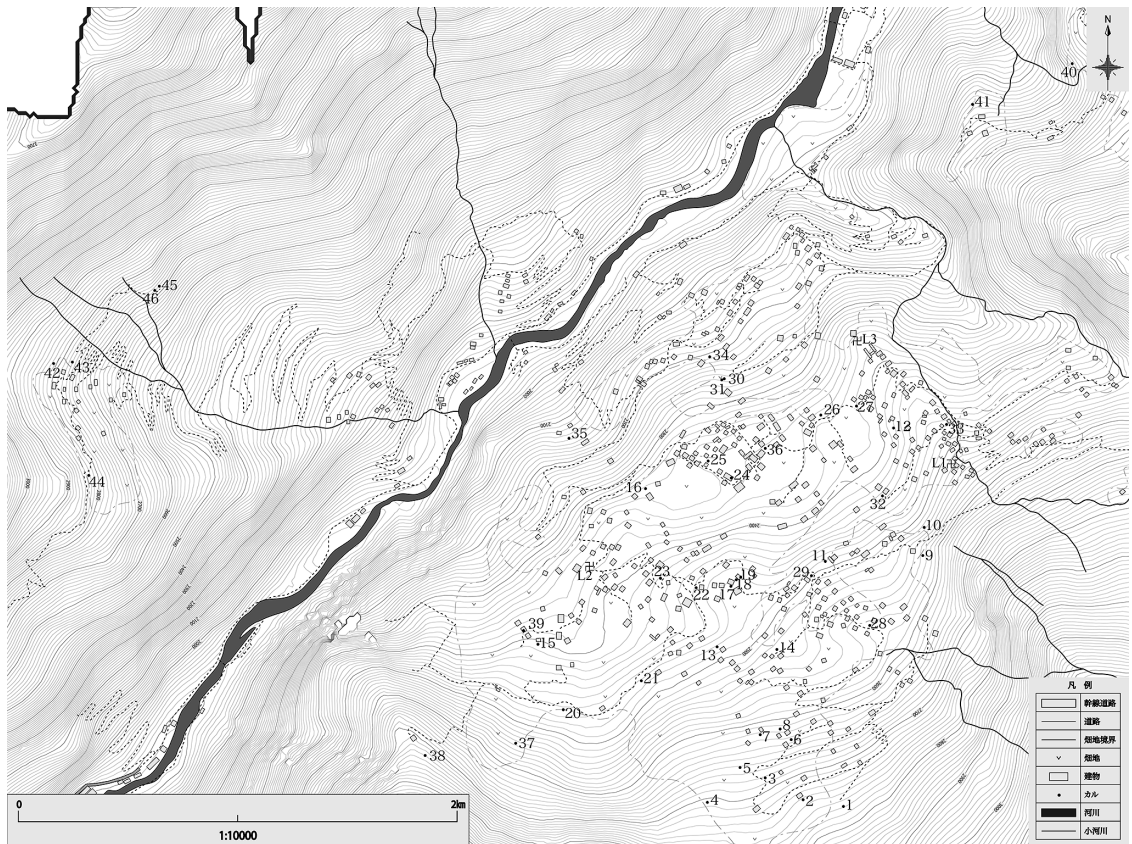


図 11 丹巴県中路郷におけるカルの分布状況 野口尚志・セルボンジャ作成

表1 丹巴県中路郷におけるカルの現存状況 筆者作成

番号	名称	標高 /m	底部面積 / m <sup>2</sup>	高さ /m	内側	外側	最上部	C14年代	構造	窓の附属施設	出入口の位置 /m	壁体の厚さ /m
1	ku tse mkhar	2779	4.97×5.69	15.4	/	方形	突出しない		単独	あり	東面6	/
2	ago mkhar	2662	5.4×6.5	28	方形、控壁あり	方形	突出しない		家屋と連結	あり	西面1	1.7
3	ljang kshis mkhar	2605	6.74×6.6	20	/	方形	70年代半分破壊		家屋と連結	ない	南東面6.8	/
4	ki pa mkhar	2634	4.82×5.92	紅音氏25	方形、控壁あり	方形	突出しない		単独	あり	南面5.3	/
5	ka bkra mkhar	2559	突起距離2.1	紅音氏14	/	八角形	跳ねだし二重	1290-1430	家屋と連結	/	/	/
6	so ko mkhar	2549	6.4×4.8	20	/	方形	跳ねだし二重		家屋と連結	あり	南面6	/
7	sa rgod mkhar	2475	5.9×5.9	3	/	方形	/		/	/	無	/
8	gur nye mkhar	2549	6.35×5.63	22.6	方形、控壁あり	方形	突出しない		/	あり	北面6	1.1
9	pa tso mkhar	2494	5.05×4.8	16.5	/	方形	突出しない		家屋と連結	あり	東面3	/
10	sa bo mkhar	2468	6.43×5.6	33	/	方形	突出しない		単独	あり	北西面6.26	/
11	gzu po mkhar	2412	7.25×7	31	/	方形	突出しない		単独	あり	南面4.7	/
12	si rje mkhar	2375	5.6×5.5	27	方形、控壁あり	方形	突出しない		単独	あり	東面5	1.3
13	go he mkhar	2425	6.75×5.95	30	方形、控壁あり	方形	突出 修復あり		単独	あり	南面6	/
14	gzan kha mkhar	2442	6.6×6.4	24	方形、隔壁	方形	突出しない		単独	あり	北面3	/
15	o che mkhar	2381	6.4×6.2	13.6	方形	方形	跳ねだし二重		家屋と連結	ない	西面5	/
16	um 'bu mkhar	2232	5.75×5.8	28	方形、控壁あり	方形	突出しない	1300	単独	あり	南面4	/
17	pa he mkhar	2336	6.6×6.7	37	方形、控壁あり	方形	跳ねだしあり		家屋と連結	あり	南面7.2	/
18	he sa mkhar	2357	5.7×6	16	/	方形	突出しない		家屋と連結	あり	南面6	/
19	o ru mkhar	2385	5.9×5.9	17.5	方形、北東のみに控壁あり	方形	突出しない		家屋と連結	あり	/	/
20	khang rnyang mkhar	2410	5.3×5.10	27	/	方形	突出しない		家屋と連結	あり	西面5	/
21	a bo mkhar	2408	6.45×5.2	11	/	方形	壊れ		単独	あり	北面9	/
22	skhri kha mkhar	2309	突起距離3.9	4.8	/	八角形	壊れ		単独	/	無	/
23	o kha mkhar	2353	6.9×7	25.5	方形、控壁あり	方形	突出しない		単独	あり	/	1.6
24	khang po mkhar	2267	5.9×5.5	25	方形、控壁あり	方形	跳ねだし二重		家屋と連結	あり	南東面6	/
25	gzan mo mkhar	2296	6.2×6.6	13	/	方形	残らない		家屋と連結	ない	北東面5.5	/
26	he yi mkhar	2373	5.45×4.55	14.7	/	方形	跳ねだし二重		家屋と連結	あり	南面0.2	/
27	kho bha mkhar	2374	6.2×6.8	11.6	/	方形	突出しない		家屋と連結	/	南西面室内2.2	/
28	gza kha mkhar	2428	5.85×5.42	23	方形、控壁、隔壁ない	方形	突出しない		単独	ない	南東面2	/
29	jo gshis mkhar	2474	6.7×5.8	13	/	方形	残らない		家屋と連結	ない	/	/
30	bod ris mkhar 1	2261	6.1×4.8	6.8	/	方形	残らない		単独	/	無	/
31	bod ris mkhar 2	2230	5.5×5.62	7.8	/	方形	残らない		単独	/	無	/
32	mo to mkhar	2368	5.5×5.61	4.2	/	方形	残らない		/	/	無	/
33	mo to mkhar 向東南300m	2415	6.8×6	11	方形、控壁あり	方形	残らない		家屋と連結	あり	/	1.22
34	zur brgyd mkhar	2126	突起距離3.84	4.1	/	八角形	残らない	1300-1440	単独	/	無	/
35	bar te mkhar	2176	5.45×6.15	19.88	方形、控壁あり	方形	跳ねだしあり		家屋と連結	あり	北西面5.5	/
36	dong pho mkhar	2282	6×6	13	/	方形	跳ねだしあり	1300-1440	家屋と連結	あり	/	/
37	nags gseb	2503	4×4.3	1.5	/	方形	残らない		/	/	/	/
38	ri mgo	2653	/	7.7	/	方形	/		/	/	/	/
39	ye ho mkhar	2381	7.02×6.29	12	/	方形	突出しない		家屋と連結	/	/	/
40	sbrel lung mkhar chag	2384	4.9×4.74	6.2	/	方形	残らない		単独	/	無	/
41	sbrel lung mkhar	2335	4.55×5.55	15.5	方形、四面に控壁あり	方形	突出しない		単独	あり	南東面5	/
42	sngo stod (1)	2794	4.6×5.5	14	/	方形	/		単独	あり	/	/
43	sngo stod (2)	2801	4.8×5.6	5	/	方形	/		単独	/	/	/
44	sngo stod (3)	2614	6.9×7	20	方形、控壁あり	方形	突出しない		単独	あり	北東面7.6	/
45	nge po mkhar	2694	3.5×5.5	28.5	方形、控壁、隔壁ない	方形	持ち送りに跳ねだし		単独	ない	南東6	1.58
46	nngo stod (4)	2602	4.5×5	3	/	方形	/		単独	/	無	/
L1	ago bha lha khang	2424	6.9×6.9	13	/	方形	残らない		/	ない	/	/
L2	skyid mkhar lha khang	2334	8.15×7.95	15.8	方形、二階に十字形隔壁	方形	修復された		/	ない	/	/
L3	sa glang dkar po lha khang	2343	7×7	8.7	/	方形	/		/	/	/	/

清朝は大規模な平定を行うことになる。

### 3、丹巴県中路郷におけるカルの現状

丹巴県は現存するカルの数が最も多いところである。現存数について、343基、562基、346基の三説ある。基数が一致しない理由として、各研究者が残

存遺構を数字に入れたかどうかで異なっているとされる(石碩・楊嘉銘・鄒立波:2012)。中路郷にも同じく、88基(王晓婧:2013)、残存遺構52基を含み、104基(多爾吉・紅音・阿根:2011)など一致していない。

私の調査では、中路郷において、カル46基、ラ



カン(lha khang 仏堂)3基が確認できた(図11、表1)。カル46基の中、14基のカルに内側に控壁が造られている。カル12基に内側の二つの面に控壁が造られ、K19(Kはカルを示す)は一面のみ控壁を造り、K41は四面に控壁、K14には隔壁が造られている。黄曉帆氏の変遷案に対照することによって、15基のカルが第1期に相当し、南宋(1127～1279)から明(1368～1662)中期の間に造られたと推定できる。その中で、K13、K17、K24、K35の最上部に跳ね出しを造り、残りは跳ね出しが見られなく、壁体に沿って姫垣が造られている。

K28、K45の内側には控壁が見られない。同じく黄曉帆氏の変遷案に対照することによって、第2期に相当し、明中期から清(1636～1912)後期の間に造られたと推定できる。K45の最上部に持ち送りを木で造り、その上に跳ね出しが2ヶ所見られる。

現在、内側の作り方を確認できないカルが29基ある。最上部だけの特徴から、上記のK45のみ第2期に相当し、そのほかのカルがすべて第1期の作り方をういている。

以上のことから、長時間に渡り中路郷において、カルの築造の続いたことが伺える。

#### 4、丹巴県中路郷におけるカルの特徴

##### I 平面構造の特徴

中路郷において、平面構造から家屋と連結するカルと、単独に築造されたカルの二つの種類に分けられる。地震の影響によって、家屋をカルと離れた場所に新築することが多い。過去家屋と連結した痕跡が残っているカルは15基、現在なお家屋と連結しているカルは4基、単独に造られカルは22基、残存遺構で、確認できないカルは5基ある。

村落の中に家屋と連結するカルがあり、単独に造られたカルも現存している。それに対して、村落外縁に位置するカルはすべて単独に造られている。

村落内のカルは平坦な場所に築造されているが、村落外縁のカルは平坦な場所ではなく、K38のように丘陵上に位置したり、K10、K37、K44、K45、K46のように急峻な山の斜面に位置したりしている。特にK44、K45は岩盤上に築造されている。

##### II 立面の特徴

###### i 射撃口

現存するカルの中で、一部破壊されて確認できな



写真11 1字形孔

い状況もあるほか、単独で造ったカルと家屋と連結するカル両方に外側が狭く、内側が広い1字形の孔が造られている(写真11)。

清朝の文献記述からこのような1字形孔について、『平定金川方略』に「臣自入番境，經由各地，所見尺寸皆山，陡峻無比，隘口處所，則設有礮樓(カル)，累石如小城，中峙一最高，狀如浮囷，或八九丈十餘丈，甚至有十五六丈者，四圍高下皆有小孔，以資瞭望，以施鎗礮。」と記述し<sup>xi</sup>、小孔を以て眺めるに資し、鎗と火砲を施すと述べ、『金川鎖記』に「礮樓(カル)如小城，下大巔細。有高者三四十丈者，中有數十層。每層四面，各有方孔，可施鎗砲」と記述され<sup>xii</sup>、同じくカルの四面に設けられた方形孔が鎗砲を施す可しと述べている。また、『清実録』に「賊人礮(カル)牆皆斜眼，賊在礮(カル)内由上望下，窺視我兵放槍，甚便而准。我兵在外放槍擊打，為上口裏層斜牆所擋，不能直透」と記述されているように<sup>xiii</sup>、小孔が斜眼できるように設けられている。しかし、中路郷のカルの中で、現在なお家屋と連結しているカルのみ、内側から射撃口の作り方が伺え、そのほかのカルは、長時間使用しなかったため、内側の構造が倒壊し、内側から射撃口の特徴は確認できない。

以上清朝の史料から、現存するカルに設けられた1字形の孔が防御性を持った射撃口であることは明らかである。しかし、カルの築造年代がこれらの記述より以前に遡る。造ったカルに新しく射撃口を造ることができないため、築造時点から、防御を考慮した施設だと考えられる。

また、『金川鎖記』に18世紀の兵器について以下のように記述されている。「夷人多膂力、類能手挽強弓、然弓小如箕、弦控牛筋、復羸笨不相稱、箭鏃利甚、卻無翎羽、是以射近能飲石、不能及百步之遠。又善用火鎗、鎗製亦與中華小異。綏靖有飛鎗手十餘人、能殛飛鳥、亦屯練中表表者」<sup>xiv</sup> 当時の武器は箕の如き小さな弓と火鎗を用いて防御したことが伺える。



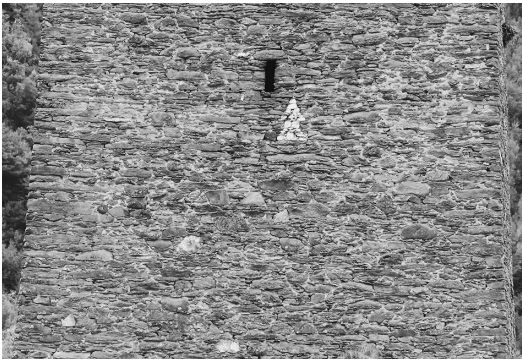


写真12 仏塔



写真13 蓮華



写真14 動物の角



写真15 出入口



写真16 出入口

## ii 符号

中路郷に現存するカルの中で、2基の壁体外側に白石を嵌め込んだ符号が見られる。K2に仏塔(写真12)、蓮華の符号が見られ(写真13)、K14に動物の角が見られる(写真14)。

K2に嵌め込んだ仏塔、蓮華の符号から、カルの築造に仏教の受容を受けていることが伺えるが、北西面のほかに、壁体に射撃口を設けているため、単純な宗教施設とは考えられない。中路郷のほかにも動物の角の符号が数点見られる。そのほか、馬、卍字なども見られる。紅音氏は動物の符号は古代氏族の bla zog<sup>xv</sup> と関連すると指摘されている(紅音:2014)。

## iii 出入口

中路郷において、過去家屋と連結した痕跡が残っているカルに、出入口がいくつか上下に並べられている状況がある。普段家屋と連結したカルの出入口は家屋の内側、あるいは家屋の屋根にあり、家屋の各層の内側からカルに入れるように出入口を配置している。家屋を新築する際に、元の家屋のみ壊し、カルを残したので、現存するカルに出入口が多く見られる状況になったと考えられる(写真15)。

家屋の内側からカルに入るように出入口を配置したため、家屋と連結するカルの中に出入口の位置が地面から0.2mに造っている事例が見られるが(写



写真17 充填した出入口



写真18 充填した出入口



写真19 運搬

真16)、多くの場合、出入口を高く造っている。また、単独で造られたカルの出入口は、家屋と連結したカルより比較的高いところに位置している。

また、出入口の大きさ程度の穴を充填した事例が多く見られる。第1期のカルにもあり(写真17)、第2期のK45にも確認できる(写真18)。なぜ最初に入出入口を造り、のちに充填したのだろうか。

筆者が中路郷で調査をしている際に、村人から「最初の出入口の方向は家に不幸をもたらし、のちに方向を変えた」と説明した<sup>xvi</sup>。しかし、家屋と連結するカルだけではなく、K45のような、村落と遠く離れた場所に築造されたカルにも充填した出入口が見られる。この点から、「家に不幸をもたらした」という理由だけでは説明できない。

なぜ充填したのかについて、カルの築造の過程を振り返って見る必要があると思う。先行研究においてカルの築造に数年必要で、ある程度まで築造して乾かし、また増築すると述べてきた。しかし、どのように材料を運搬されたのかについては言及していない。カルの築造に大量の石材の運搬が必要である。現在、民居を造る際に、壁体に板をかけて石を運搬していることが見られる(写真19)。おそらく、カルも同様で、一定の高さまでこのように石を運んだとしたら、最上部まで板をかけられなく、出入口から石材、泥を運ばなければならない。

山の斜面に位置するK45の出入口は南東面に向け、山に面した北西面に充填した出入口が設けている。このカルに石を運ぼうとすると、山に面した北面が理想的であって、南東面に向ける出入口から運ぶのは極めて難しい。だから、K45のように、最初は材料の運搬にふさわしい入り口を設けたが、材料を持ち込む入り口と出入口の位置は決して一致するわけではなく、カルの築造が完成した後、必要ではない出入口を充填したと考えられる。

## 考察

本論文では四川省丹巴県中路郷におけるカルの詳細な現状を把握し、それを他地域と比較することによって、中路郷におけるカルの機能を導くことを目的とした。先行研究で史料を基づく研究において、『後漢書』、『唐書』での記述から、築造年代を測定した。ところが、炭素14年代測定結果とそれに基づいた変遷と比較することで、現存するギャロンのカルは南宋から清朝末期までの遺構と推定した。



南宋から清朝までは、ギャロンを含む西南地域は徐々に中央朝廷との関わりが多くなる時期である。フビライによる大理への遠征と、その後の元と南宋の対峙の間に挟まれた。明になると、土司政策が本格的に始まり、これらの土司の間、土地の奪い合いを目的とした争いが絶えず、明清の地方官員が調停をすることになった。清朝乾隆帝の時には、土司間の争いがより頻繁になり、加えてギャロンはチベット本土に入る重要な場所に立ち、清朝にとって、チベットを統治するにはギャロンの安定が必須であった。しばしば起こった土司間の争いが2次に渡る「平定両金川戦役」を招いた。当時、カルは清軍を防ぐ重要な防御施設となった。南宋から清朝末期までの土司間の多くの争い、長期間に渡る清朝との戦役で、数多くのカルを築造する必要性が生じた。

しかし、中路郷におけるカルの分布状況から、カルは土司の所有だけではなく、百姓もカルを持ち、土司間の争いの影響で各家が自ら財産、身の安全を確保する必要があり、平和な時には財産と能力の象徴でもあった。

村落外縁の山の斜面に位置するカルは、個別の家ものではなく、村落共同の所有と考えられる。一つの地点のみならず、カル同士を確認できる立地状況から、道沿いの動きをいち早く把握することができ、カル同士間の連絡を通じて情報を提供することができる。いずれにせよ、中路郷におけるカルは各家の自衛と村落共同の防御を目的として造られたものと考えられる。

## 謝辞

本稿の作成にあたって、指導教員である滋賀県立大学人間文化学部地域文化学科教授中井均先生に大変お世話になりました。厚くお礼申し上げます。

## 参考・引用文献

### チベット語

- ・ Samten G.Karmay .Yasuhiko Nagano,2001. A Catalogue of the New Collection of Bonpo Katen Texts.Bon Studies4. National Museum of Ethnology Osaka
- ・ btsan lha ngag dbang.rdo rje.tA re skyid bcas kiyis bsgrigs,2003.rgyal rong zhib 'jug dpyad yig phyogs bsgrigs.(嘉絨藏族研究資料匯編)krung go'i bod rig pa dpe skrun khang.(中国藏学出版社)
- ・ Samten G.Karmay,1998,Anthology of articles on socio-cultural issues, myths, rituals, and beliefs in ancient Tibet.bde khang bsod nams chos rgyal, 2007.mda' dang 'phang /mkhar rme'u bsam gtan gyi gsung rtsom phyogs bsgrigs.(卡爾梅・桑丹堅參選集-藏族歷史、傳說、宗教儀軌和信仰研究)krung go'i bod rig pa dpe skrun khang.(中国藏学出版社)
- ・ mi nyag thub bstan chos dar, 2016.Khams mi nyag ljags la rgyal po'i rgyal rabs gsal b'i me. long.(康定明正土司簡史)mi rigs dpe skrun khang.(民族出版社)
- ・ brag bar dpal ldan, 2002.bod rgyal mo rong gi lo rgyus rab gsal me long.(嘉絨藏族歷史)krung go mi dmang chab srid gros mol tshogs 'du 'bar khams rdzong u yon lhan khang rig gnas lo rgyus dpyad gzhi'i yig cha deb bzhi ba.(中国人民政治協商會議馬爾康县委文史資料選輯第4輯)
- ・ gtsang stod ngam ring chen mo chos phun tshogs, 2013.rang gi lo rgyus mdor bsod brjed byang dang 'brel bod kyi khang bzo'i skor cung zad brjed pa nyams myong rgan po'i 'bel gtam bzhugs so. nor gling bod kyi rig gzhung gces skyong khang.
- ・ dmu dge bsam gtan, 1997.rje dmu dge bsam gtan rgya mtsho'i gsung 'bum pod gsum pa bzhugs so.(毛爾蓋・桑木丹全集 第三卷)mtsho sngon mi rigs dpe skrun khang.(青海民族出版社)
- ・ rnga ba khul bod kyi lo rgyus rig gnas dang gna' dpe zhib 'jug mthun tshogs kiyis bsgrigs, 2017. rgyal rong sa khul gyi rgyal po dang yig tshags skor.(嘉絨地区傑布和文書檔案)si khron dus deb tshogs pa\_si khron mi rigs dpe skrun khang.(四川党建期刊集團 四川民族出版社)

### 中国語

- ・ 孫宏開, 1981 「“邛籠”考」『民族研究』1981年第1期
- ・ 孫宏開, 1986 「試論“邛籠”文化与羌語支語言」『民族研究』1986年第2期
- ・ 馬長寿, 1984 『氏与羌』上海人民出版社



- ・ 莊吉發, 1987 『清高宗十全武功研究』 中華書局出版
- ・ 張昌富, 1992 『嘉絨藏族的石碉建築』 『西藏研究』 1992年第1期
- ・ 張昌富, 1995 『乾隆平定金川对嘉絨文化的影響』 『西藏芸術研究』 1995年第2期
- ・ 陳慶英, 1999 『明代甘青川藏族地区的政治述略』 『西藏研究』 1999年第2期
- ・ 季富政, 2000 『中国羌族建築』 西南交通大学出版社
- ・ 王明珂, 2002 『羌在漢藏之間』 台北連經事業出版公司
- ・ 夏格旺堆, 2002 『西藏高碉建築芻議』 『西藏研究』 2002年第4期
- ・ 牟子, 2002 『丹巴高碉文化』 『康定民族師範高等専科学校学報』 2002年第3期
- ・ 徐学書, 2004 『川西北的石碉文化』 『中華文化論壇』 2004年第1期
- ・ Frederique Darragon, 2005. Secret Towers of the Himalayas. 弗德瑞克・達瑞根著, 劉溯・春霞訳 『喜馬拉雅の神秘古碉』 深圳報業集团出版社
- ・ 曾現江, 2007 『胡系民族与藏彝走廊—以蒙古族为中心的歴史学考察』 四川人民出版社
- ・ 石碩, 2001 『藏族族源与藏東古文明』 四川人民出版社
- ・ 石碩, 2008 『隱藏的神性：藏彝走廊中的碉楼—从民族誌材料看碉楼起源的原初意義与功能』 『民族研究』 第1期
- ・ 楊嘉銘, 1988 『四川甘孜阿壩地区的“高碉”文化』 『西南民族学院学報』 哲社版
- ・ 楊嘉銘, 2004 『丹巴古碉建築文化総覧』 『中国藏学』 2004年第2期(総第66期)
- ・ 石碩・楊嘉銘・鄒立波, 2012 『青藏高原碉楼研究』 中国社会科学出版社
- ・ Fergusson, W.N, 1911 『Adventure, Sport and Travel on the Tibetan Steppes』 弗格森著, 張文武訳, 2003, 『青康藏區的冒險生涯』 西藏人民出版社
- ・ 紅音, 2014 『嘉絨藏族碉楼考察与思考』 『西南民族大学学報』 (人文社会科学版) 第8期
- ・ 多爾吉・紅音・阿根, 2011 『東方金字塔高原碉楼』 中国藏学出版社
- ・ 黃曉帆, 2008 『四川西部碉楼建築的初步研究』 (北京大学修士論文)
- ・ 王曉婧, 2013 『丹巴碉楼及其防御体系研究』 (湖南大学修士論文)
- ・ 鄒立波, 2017 『明清時期嘉絨藏族土司關係史』 中国社会科学出版社

日本語

- ・ Isabella L.Bird, 1899 『The Yangtze Valley and Beyond: An Account of Journeys in China, Chiefly in the Province of Sze Chuan and among the Man—tze of the Somo Territory』 イザベラ・バード著、金坂清則訳 2002 『中国奥地紀行』 平凡社
- ・ 魏源 與重院政務部訳 1943 『聖武記』 生活社
- ・ R.A.Stein, 1962 『La civilisation tibétaine』 R.A. スタン著、山口瑞鳳・定方晟訳 1971 『チベットの文化』 岩波書店
- ・ 山口瑞鳳, 1971 『東女国と白蘭——rLans氏とsBran氏——』 『東洋学報』 第五十四卷第三号
- ・ 松岡正子, 2000 『チャン族と四川チベット族』 ゆまに書房
- ・ 高田時雄, 2012 『大小両金川得勝圖』 (別冊解説) 臨川書店
- ・ 長野泰彦, 2018 『嘉戎語文法研究』 汲古書院

英語

- ・ Frederique Darragon, 2009, The Star-shaped Towers of the Tribal Corridor of Southwest China, Journal of Cambridge Studies.
- ・ Frederique Darragon, 2015, On the ancient cross-shaped towers of Nyangpo and Kongpo in eastern Central Tibet. Journal of Comparative Cultural Studies in Architecture.

註

- i 魏徵(580～643)・令狐德棻(583～666)等著 中華書局1973 『隋書』 卷八十三 p1858
- ii 劉昫(887～946)等著 中華書局1975 『舊唐書』 卷一百九十七 p5278
- iii 范曄(398～445)著〔唐〕李賢等注 中華書局1965 『後漢書』 卷八十六 p2857～2858
- iv 揚雄(前53～後18)著の『蜀王本紀』に「蠶叢始居岷山石室中」と記述され、高田時雄氏は「蠶叢ははじめ岷山の石室に住んでいた」と和訳して、揚雄『蜀王本紀』とあるのは、実際には『古文苑』卷四所収「蜀都賦」の〔宋〕章樵注に引く『先蜀記』とするのが正しいと述べている。高田時雄2012 『〔解説〕平定金川戦圖』 p6

- v 楊嘉銘氏が「石室」と命名されたのは、1989年10月から1990年12月の間、四川省文物考古研究所、甘孜藏族自治州文化局が、丹巴県中路郷罕額依村において発掘調査を行った時に見つかった石積みの建築遺構であり、当時の調査で、5m × 5m の四つのトレンチ (番号 T1、T2、T3、T4)、2m × 15m のサブトレンチをあけ、発掘面積123㎡で、T1は完掘し、T2、T3、T3に石積みの建築が見つかったため、埋め戻して保護した。四川省文物考古研究所・甘孜藏族自治州文化局,1998「丹巴県中路郷罕額依遺蹟発掘簡報」『四川考古報告集』文物出版社 p59 この簡報に石積みの建築遺構に関する写真や断面図が見られないが、李錦・陳学義・陳卓玲,2017「青藏高原石砌技艺传统与石砌起源—对甘孜州丹巴中路郷罕額依村的分析」『民族学刊』(総第44期)に石積み建築遺構の写真が載っている。(写真11、12)
- vi チャン族地域で、高石積みの建築物に「ロン」と言われる。松岡正子,2000『チャン族と四川チベット族—中国青蔵 高原東部の少数民族』,ゆまに書房
- vii 詳細な根拠を言及されていない。
- viii 当時少数民族に対する蔑称であり、イザベラ
- バードの旅行記ではギャロンの人々を指す。
- ix 四川省甘孜藏族自治州丹巴県誌編纂委員会1996『丹巴県誌』民族出版社
- x Brag dgon pa Dkon mchog bstan pa rab rgyas,1982.Deb ther rgya mtsho = yul mdo smad kyi ljongs su thub bstan rin po che ji latar dar ba'i tshul gsal bar brjod pa deb ther rgya mtsho. (安多政教史) Kan su'u mi rigs dpe skrun khang (甘肅民族出版社)
- xi 阿桂等奉敕撰 乾隆年間内府写本『平定金川方略』卷三 国立故宫博物院 p111乾隆1年9月庚子 據張廣泗奏
- xii 李心衡1936『金川鎖記』卷二 商務印書館 p18
- xiii 西藏研究編輯部1982『清実録藏族史料』西藏人民出版社 p3093
- xiv 李心衡1936『金川鎖記』卷四 商務印書館 p46
- xv bla zog の bla は魂の意味で、zog は家畜の意味である。dmu dge bsam gtan 氏はチベットの各古代氏族にはそれぞれ bla zog があり、ldong 氏は鹿、sbra 氏は馬、sga 氏は羊、'bru 氏は牛、sgo 氏は山羊である。その中で、ギャロンは sbra 族であるとする (dmu dge bsam gtan2010)。
- xiii 筆者が2018年度丹巴県で調査している際に、村人のガザンドンドップ氏 (71歳) から伺った。

## Comment

中 井 均

人間文化学部地域文化学科教授

セルボンジャ君はチベットからの留学生である。大学院進学に際して考古学を志し、進学後は方法論を学ぶために積極的に各地の発掘調査に参加してきた。そして、修士論文ではギャロンチベットのカルを研究対象とした。

中国四川省丹巴県は大金川と小金川によって形成された狭隘な谷筋に貼り付くように集落が点在している。その集落には石を積み上げた高さ20～50mにおよぶカルと呼ばれる塔が点在している。カルの実数については破壊されたものも多くあり、現在でも正確には把握されていない。形態的にも民居に伴うもの、集落の端に単独で建てられたものがあり、性格についても様々な見解が出されている。

本論文ではカル分布、構造、構築年代を詳細に

まとめ、その機能を明朝から土司に任じられた豪族が領土紛争に際して築いた軍事的な防御施設であるとし、清代には乾隆帝による金川平定戦にも用いられたことを述べている。その根拠としてカルには外に向かって狭く、内に向かって広い窓は銃眼であるとし、また、村落から離れた位置に単独で建てられたものは監視用の望楼であることなどをあげている。こうした分析はこれまでにない視点であり、カルの今後の研究に一石を投ずるものとなろう。

なお、カルは集落全域に広く分布しており、1基ずつの高低差は調査をもっとも悩ませるものである。筆者は約2ヶ月間にわたって丹念に調査を実施しており、そうした困難な調査に基づいた論文であることを付け加えておきたい。